

地域を誇り大切に思う心情を育む総合的な学習の時間について

～塙保己一先生に関わる4年間を通じたカリキュラム再編成を通して～

本庄市立金屋小学校 校長 諏訪 慎一

I はじめに

本校は埼玉県 の 3 偉人の一人、塙保己一翁の生家を学区にもつ、本庄市内でも田園地帯に位置する児童数約 250 人の学校である。3 世代同居や兄弟姉妹が多い家庭が多く、児童は素直で優しく、落ち着いた学校生活を送っている。

今まで、塙先生のお膝元の小学校として、塙先生を扱った学習をその教育活動の中心として行ってきたが、学年によってねらいや内容の重なりがあるとともに、地元には多くの慕う人がいることや塙先生の生家が学区にあるという地の利を十分にいかせていない状況があった。そのため、令和元年度に、総合的な学習の時間において塙先生を中心に扱うカリキュラムの再編成を中心とした研究を行った。

以下、その研究実践について述べる。

II 研究のねらい

1 各学年のカリキュラムのねらいや願い

教員相互で協議した結果、ねらいや願いは次の

3
点になった。

(1) 郷土の偉人塙保己一先生に学び、誇りに思うこと

が、自分たちの故郷・金屋・本庄市をいつまでも大

切に思う心情を児童に育てることにつながるの

ではないか。本校出身児童は、今後の人生で、どこ

暮らしても故郷を誇りに思い、愛情をもって欲しい。

(2) 塙先生の「世のため 後のため」の信念を学び、それを活かして、一人一人の児童がたくましく自分の人生を切り開いていって欲しい。

(3) 地域で塙先生を誇りに思う、慕う人たちの生き方

を一つの人生のモデルとして、今後の自分の生き方

を考えていって欲しい。

これをもとに、今までは3年と5年だったが、3年生から6年生の4年間の総合的な学習の時間を貫くメインの題材として塙先生を扱うようカリキュラムを再編成することとした。4年間メインの題材として塙先生を取り上げていくために、各学年の発達の段階や他教科の学習状況等も考慮しながら、その扱いに重なりがないように学年ごとの大きな内容を以下のように定めた。

3年生は、社会科の学習において積極的に地域に出て、様々な人々と関わり、直接、自分で見て聞いて学習を進めていく活動が多い。その学びの特性を活かし、この地域に残る塙先生ゆかりのものやそれを大事に守り広めようとしている人と直接、関わることを学習の主たる活動にすることを意図し、主な内容を「私たちの町の塙保己一先生」とした。この地域で少年時代を送った塙先生の姿が今の自分たちと重なり親近感をもつことができることを願った。

4年生は、これまで総合では、福祉を学年のテーマとして取り上げ、学習を積み上げてきた。地域の介護施設の訪問も毎年の恒例行事となっている。今までの福祉というテーマの中にある「障害」についての学びから、一歩踏み出し、塙先生自身が盲目となり視覚障害者として生きたことを体験的に理解する。視覚障害者としての視点で改めて塙先生を捉えていくことを意図し、主な内容を「視覚障害のある塙保己一先生」とした。塙先生は、視覚障害者であったことを体験的な学びを通して再確認し、その偉業の比類なさがより一層、児童の心に響いていくことを願った。

5年生は、社会科の学習で日本の国土を学ぶ。日本全国・世界といった見方・考え方ができるようになってくる。そのため、県の3偉人、渋沢栄一（深谷市）及び荻野吟子（熊谷市）との比較もしやすくなる。外国人のヘレンケラーが塙先生を思慕したことを主に、日本を代表する偉人というグローバルな見方で塙先生を捉え直すことを意図して主な内容を「日本の偉人 塙保己一先生」とした。世界の人々

から尊敬されるその生き方は、将来グローバルに活躍していくことが期待される児童の生き方の礎になることを願った。

6年生は、今までの塙先生自身を主に扱った学習から、視点を大きく変えて、塙先生の周りの人々にスポットライトをあてていく。塙先生は、視覚障害者でもあり、家族や弟子等の周りの力強い支えがその偉業のエンジンであったことに気づかせることを意図して主な内容を「塙保己一先生をささえた人々」とした。人と人は互いに支え合う中で生きているということを塙先生の人生を通して改めて感じさせたい。卒業という人生の大きな節目をむかえる6年生児童にとって、塙先生を支えた人々を共感的に理解することは、これまで自分自身を支えてくれた家族や周りの人々の姿と重なり、感謝を感じるはずである。それが今後の新しい生活の原動力となることを願った。

2 研究仮説と手立て

各学年のカリキュラムのねらいや願いをもとに、研究の仮説や手立てを設定した。

仮説1 各学年の児童に合ったカリキュラムを作成することで、児童の探究的な学びが深まり、塙先生に対する思いがより深まるであろう

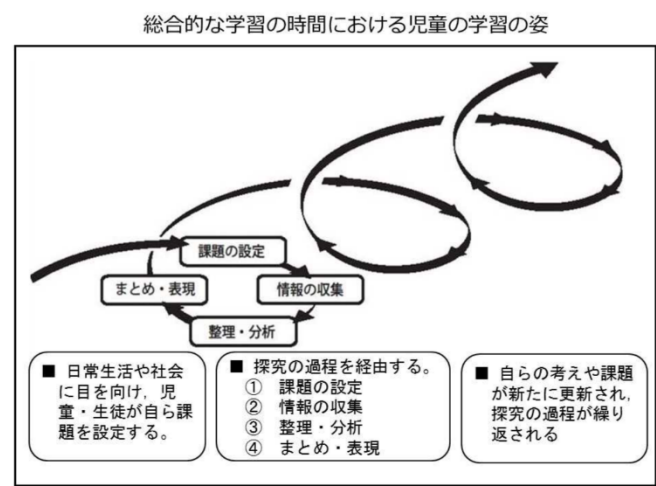
手立て 3～6年の学年で塙先生をメインの教材とし、その扱い方を学年ごとに変えるカリキュラム再編成を行う

仮説2 4年間を通して塙先生を共通テーマとしたカリキュラム再編成することを通して、教員の指導力が向上するであろう

手立て カリキュラム再編成や研究の悩みを共有し解決するために週1回の研修を確保する

3 研究推進のシステム

総合的な学習の時間は、探究的な見方・考え方を働かせて学びを進めていくことが重要である。一回の探究的な学習サイクルだけでなく、そのサイクル



を何度も回していくことが学びの深まりにつながると捉えている。

そのためには、児童の意識の的確な把握が必要である。「今、児童はどう感じているのか、何をしたいと願っているのか。」ていねいに児童の意識を捉えながら、学習を進めていく必要があった。また、塙先生を扱う各学年の内容が重ならないよう調整が必要であった。さらに、教科書がない総合的な学習のカリキュラムづくりは、担当する教員全員が初めてのことであり、打ち合わせ等が何度も必要となることが予想された。

このための時間を生み出すことが最初の大きなハードルとなった。頻繁に互いの実践を検証し検討を加えながら進めていくためには、毎週放課後、研修を行いたかったが無理があった。そのため、校内の教員を総合チーム、算数チーム、低学年チーム（算数）の3つにわけ、5～7人程度のチームごとに毎週、火曜日の2・3・6校時目の授業中の裏の1コマをチームの研修の時間として研究を進めていくこととした。

各チームは、目標や願い等を共有しながら、小刻みなPDCAサイクルを回し続けた。ねらいやゴールは共有しながらも、「走りながら考える」といった目の前の課題解決を重視した実践的な研究スタイルで行った。

III 研究の実際

まず、各学年の決められた年間の指導時数の中に、どのような探究活動を行っていくかを入れてみた。そしてその流れで、児童の意識がどのように流れていくかを予想しながら、計画を修正した。実践を行いながらも何度も修正を続けた。さながら作っては壊し、作っては壊すことの繰り返しだった。チームの教員はよくがんばった。

資料1 作成した大・小単元計画等

総合的な学習の時間 学習計画 6年「塙保己一先生をささえた人々」大単元編		
単元の目標	塙先生は多くの人の支えがあって素晴らしい国学者になったことを知る。 ・ 塙保己一先生は周りからの多くのささえがあって生きてきたことに気付くことができる。(知識及び技能) ・ 課題の解決に向けて他の児童の考えを参考にしたり、必要な情報を集め分類したり、整理したりして自分の考えを表現することができる。(思考力、判断力、表現力等)	

総合的な学習の時間 学習計画 6年「塙保己一先生をささえた人々」小単元編		
①小単元の目標	学習活動	児童の意識
塙保己一先生の人物像を考える。 ・ 今まで学んできた塙先生の情報を基に、各自が考える塙先生の人物像を考えことができる。(思考)	・ 各自が塙先生の人物像を考える。	・ 塙先生は障害がありながらも偉業を成し遂げたすごい人。 ・ 塙先生は勉強熱心な人。 ・ 勉強が好きというだけで偉業をなしとげられたのかな。
②小単元の目標	学習活動	児童の意識
塙先生をささえた人々について調べる。 ・ 必要な情報を集め分類したり、整理したりして自分の考えを表現することができる。(表現)	・ 塙先生をささえた人々の相関図を作成する。 ・ ささえた人々のエピソードや理由を調べる。	・ 塙先生と関わりがあった人がこんなにたくさんいたんだ。 ・ 多くの人が塙先生を助けている。 ・ 塙先生が頑張る姿に、たくさんの人たちが応援したくなったんだ。

～ 以下 略 ～

実践を進めながら、専門家や協力者の人を見つけ、塙先生関連の書籍を読み、知識も高めながら進んだ。各学年の主な内容は決まったものの、それを具体的な授業ベースの計画にしていくことは、正にゼロからのスタートであった。本市の学力向上の指導者である嶋野道弘先生に、博報堂財団子ども研究所との共同プロジェクトである静岡市立清水江尻小学校の「巴川そうじ大会」、横浜市立大岡小学校の「みつばちが教えてくれたこと」などの先進校の取組も紹介してもらい、総合的な学習の時間のあり方についても学びながら、実践を重ねた。以下学年ごとにその実践を述べる。

1 3年生の実践

塙先生について、あやふやな理解のままであるという実態の3年生は、生家がある保木野地区の児童の「塙先生の何かがある。」というつぶやきを手がかりに、全員で記念碑を見学調査に行った。渋沢栄一翁が建立した立派な記念碑であるが、そこに書かれている漢字が読めず、すごさは感じたものの、より一層、疑問を大きくふくらませて帰校した。その後、担任の助言もあり、再度、地域の専門家の方に、記念碑を前にして説明をしてもらった。長らくわからないことがわかった時の児童の勢いはすさまじく、理解が新たな疑問を次々に生み出した。

写真2 碑の前に専門家の説明を聞く児童



その勢いに乗じて、塙保己一記念館の見学に行った。そこでも、見学とともに専門家の方から説明も聞くことができ、「保己一先生のすごさを知れたよ。」といった感想をもつ児童も増えてきた。その後、校内にある塙先生の坐像をきっかけに、この像を寄付した方の末裔で、かつて地域の名産であった瓦の製造会社の社長さんから、塙先生を大切にする地域

の方々の思いを教えてもらった。その後、自分たちも今まで出会った人たちと同じように塙先生を紹介したいという強い思いをもつようになり、紹介パンフレットを作成した。(最後はパンフレットを置いてくれるところを探して、見てもらう予定であったが休校となった)

地域にある塙先生関連のものや人との出会いは、児童にとって、見て触れて聞いて教えてもらえるものであり、わかりやすく児童の探究意欲を高めた。教員も児童といっしょになって地域の塙先生を追いかけて続けた。

写真3 塙保己一記念館の見学に行った



2 4年生の実践

まず高齢者や障害のある方について調べていった。どんな場面でどのような支援が必要なのか、そのために自分たちはどうしたらよいのかを資料をもとに調べた。さらに、より深く理解をするために、高齢者や車いす、目が見えない方等の疑似体験をしながら、隣りで寄り添ってくれる人の存在や手を取ってくれる人のありがたさなどを実感した。その後、市社会福祉協議会の紹介でお会いした盲人協会の会長のお話は、それまでの「障害のある人＝かわいそうな人、支援をされる人」という児童の固定概念を崩すこととなった。障害を受け入れ、明るく前向きに生きているその姿に、児童は勇気づけられた。「自分も他の人の役に立ちたい。」という思いを強くもった児童は、恒例の介護施設訪問への意欲を高めていった。盲人協会会長から学んだ経験から、お年寄りに対する自分たちの思い込みを捨て、相手の実態をより深く理解し、相手の立場にたった訪問にしたいと児童は願った。そのため、恒例の訪問の前に、どのような方々がどのようにすごしているのか、どのようなことが喜びとなるのか、配慮することは何かな

どを調査するために、施設を事前訪問をし、お年寄りに直接、お話を聞くとともに、そのニーズを把握してきた。

写真4 施設にて直接、お年寄りに話を聞く



それをもとに、訪問プログラムを考え、よりよい訪問にするため、保護者の前でリハーサルをし、改善のポイントを教えてもらった上で訪問をした。その後、視覚障害者として塙先生を捉え直し、今までの体験や学びからその偉業について改めて考えた。様々な体験を重ねるたびに、自分の思い込みに気づき、新しい見方や考え方を獲得し、それを次の活動に活かしていった4年生であった。

写真5 お年寄りと施設で交流をした



3 5年生の実践

3年生の時に、塙先生について学んだのだが、その理解もあやふやなところがある実態であった。そのため、再度、日本の偉人としての塙先生について調べるとともに、5年生として視点を活かして、ヘレンケラーとの関係を主に探究を進めた。その資料となった本の著者である塙正一先生を学校へお招き

し、自分たちで調べてもわからなかったことなどを直接質問した。

写真6 塙正一先生に直接、質問をした

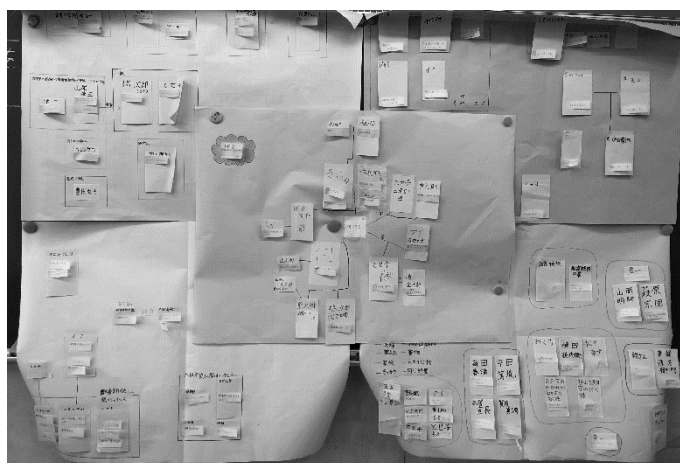


その後、塙先生のことを実はよく知らないと思われる保護者にまず紹介したいという児童の願いのもと、保護者向けの発表会を行った。準備や発表会において、新たな疑問や自分たちの理解のあやふやなところが明らかになり、渋谷区にある温故学会へ答を求めて行った。群書類従の版木等を見学するとともに、理事長さんから、さらに詳しいお話を聞き、自分たちの知識を高めた。そして、学んだことを再び、多くの方々へ紹介しようと準備をしていたが、休校で最後の紹介ができなかった。5年生は、まだ歴史を勉強していなくて、江戸時代の状況に対する理解が乏しく、現実感をもって塙先生を捉えることに苦労したようである。この部分をどう児童の知識にフォローしていくかが課題として残った。

4 6年生の実践

塙保己一先生を支えた人々について、本で調べ、その関わりを塙先生の人生を「江戸に出る前」などのように人生の節目ごとに大きく区切って、その時代ごとの人物相関図にまとめた。多くの人々が、塙先生を支えていたことよくわかった。

写真7 児童がまとめた人物相関図



その後、児童が資料としたいくつかの本の作者でもある堺正一先生に直接会い、堺先生の塙先生を多くの人に伝えたいという熱い思いに感化され、自分たちも伝えたいという思いをもつようになっていった。だれにどのように伝えていくかなどを話し合い、ポスターやパンフレットを作成し、多くの人の目にふれるところに掲示してもらうように各所に交渉をした。児玉文化会館や市役所児玉支所などに許可をもらい、自分たちの手でそれを貼ってきた。

そして計画をしていた自分たちの周りのお世話になった方々への思いをめぐらし、感謝等を表現することは休校となり、ゴールまでたどり着けなかった。大きく盛り上がっていた6年生にとって、小学校最後の最大の学習になるはずであった。6年間の総まとめとして、そこまでやり遂げさせたかった。

写真8 役所にポスター掲示の依頼に行った



写真9 役所入口に掲示された児童のポスター

やパンフレット

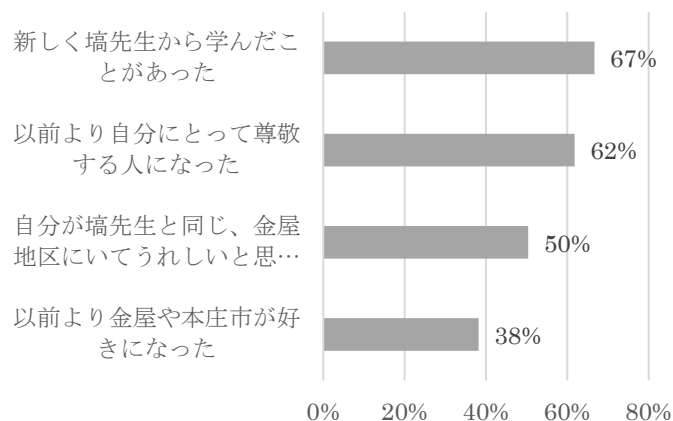


IV 研究の成果と課題

1 仮説1について

下記にある児童自身が感じた学習前後の自分の変容に関わる調査結果を見ると多くの児童が、学習を通して、何等かの自分の変容（成長）を実感していることがわかった。特に教員が年度当初願った「郷土の偉人塙保己一先生に学び、誇りに思うことが、自分たちの故郷・金屋・本庄市をいつまでも大切に思う心情を児童に育てることにつながる」ことに成果があったと推察する。

児童自身が感じた学習前後の自分の変容（123名回答）



2 仮説2について

毎週、火曜日の3校時目の授業中の裏の1コマをチームごとの研修の時間として研究を進めていくことに確保したことで、定期的に、カリキュラム再編成に取り組めた。チームの教員のふりかえりを見ると「塙先生について私も学べた」という自分自身の知識の向上や「他の教員とたくさん意見を交わして授業力を高めることができた」という共に検討・協議等を重ねた結果の自分自身の成長の実感などが見

て取れた。また、大変だったこととして「それぞれの学年テーマに沿いながら、児童の探究を深めさせていくために、試行錯誤したこと」を挙げている者が多かった。カリキュラムを1から作ったことがない教員にとって、高い目標だったところがあったかもしれない。しかしながら、どの教員も、授業づくりに対する意欲と自信が高まったことを身近で見ていて感じる。教員の指導力の向上及び教員としての成長にもつながったのではないかと感じている。

3 研究実践全体を通しての成果と課題

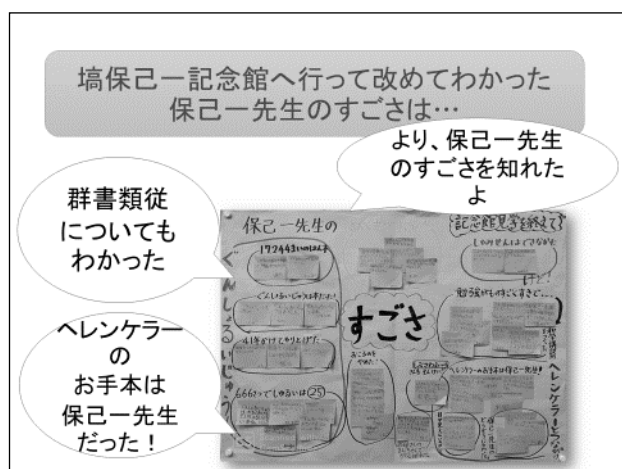
(1) 成果

各学年の最後の取組やまとめなどが、新型コロナウイルスによる休校で十分に行えなかったところがあった。しかしながら、3年から6年の4年間の総合的な学習の時間を貫くメインの題材として塙先生を扱うカリキュラムを再編成するという目標はほぼ達成することはできた。

郷土の偉人塙保己一先生に学び、誇りに思ようになった児童が増えた。今後、毎年、学習を積み上げていくことで、その思いはより確かなものになっていくのではないかと期待をしている。また、塙先生を大事に思う地域や専門家の方々との出会いを通して、塙先生の偉大さを実感したようである。

自分たちで課題を見つけ探究をしていくことや様々な発表を評価してもらえたことは、児童の探究的な学習をより主体的なものにしていった。付箋をつかったワークや様々な話し合いが他教科でも熱心に活発に行われるようになり、児童の豊かな発想がより多く表現されるようになった。総合の学習経験が他教科でも活き、思考ツールや付箋を使った学習活動が増えた。

写真 10 児童がまとめた塙先生のすごさ



塙先生の扱いを学年ごとに区別したつもりであったが、内容等が重なってしまったところがあった。教員の塙先生に対する知識も不足していたところがあり、ファシリテーションすることも苦労したところがあった。毎年、教員も経験を積み、カリキュラムを改訂していく中で、次第に改善されていくであろう。今年度は、総合的な学習の時間のみのカリキュラム再編成であったが、例えば国語で学んだ「インタビューの仕方」を実際に専門家の方にお話を聞く際に効果的に活かせるよう他教科の年間指導計画も調整するなどの教科横断的な視点を積極的に取り入れていきたい。

児童が調べることに使った資料（本やインターネット）が学年によっては理解することが難しかった。江戸時代の人物なので、その時代状況の理解が不足しており、現実感をもって塙先生を捉えづらい児童もいたようである。また、児童の自由な発想にまかせると収集がつかなくなりうるところもあった。児童の興味関心を大事にしながら、学習を進めていく教員の指導力の向上が必要である。

V おわりに

朝の登校指導で、校門のところで一人のお年寄りに呼び止められたことがあった。「先生、俺はこの卒業生なんだ。ここはあの塙保己一先生の学校だ。先生、第二の塙先生を育ててくれ。」このように励まされた。4年間の総合的な学習の時間を貫くメインの題材として塙先生を扱うカリキュラムを再編成することはまだ始まったばかりである。令和2年度は、令和元年度のカリキュラムを活かして、3年生は、塙先生の坐像の探究から始めた。4年生は、高齢者や障害者等の体験をし、盲人協会会長のお話をリモートで聞いた。5年生はヘレンケラーや渋沢栄一、荻野吟子との比較調査を始めるため各記念館に連絡をとった。6年生は塙先生の人物相関図を作成した。毎年、総合的な学習のカリキュラムは、児童とともに再編成され続けていく。その度に担当する教員たちが知恵をしばって実践を進めていく。その積み重ねが、児童の心に塙先生を写し、それが将来にわたって故郷を思う灯になることを期待して、今年度も総合チームの教員とともに、カリキュラムづくりを行っている。今回、新たに作成したこのカリキュラムが塙先生と同様に、本校にとっていつまでも輝く宝になることを願っている。

VI 参考文献

(2) 課題

- 1 堺正一 (2009)「素顔の塙保己一 盲目の学
者を支えた女性たち」埼玉新聞社
- 2 堺正一 (2005)「塙保己一とともに ヘレンケラ
ー
と塙保己一」はる書房
- 3 堺正一 (2016)「埼玉県の三偉人」さわらび舎
- 4 原作 花井泰子、マンガ しいやみつのり (2009)
「マンガ 塙保己一」 星雲社
- 5 文部科学省 (2018)「小学校学習指導要領解説
総
合的な学習の時間編」東洋館出版社
- 6 嶋野道弘 (2000)「総合的な学習の時間 実践へ
の
アプローチ」全国教育新聞社
- 7 嶋野道弘 (2018)「学びの哲学」東洋館出版社
- 8 博報財団こども研究所 (2017)「地域まるごと学
校
だ」公益財団法人 博報児童教育振興会